

地域医療の問題発掘

名市大 解決策など活動発表

県内のへき地や離島、商店街などさまざまなコミュニティを対象に、学生が地域の医療ニーズを発掘し、解決に取り組んだ活動成果の発表会が二十一日、名古屋市瑞穂区の名古屋市立大であった。

同大は医学、薬学、看護学部の医療系三学部が連携し、二〇〇八年度から一年生対象に独自の地域参加型学習のカリキュラムを続けている。本年度は、三学部の学生が二十四チームに分かれて豊根村

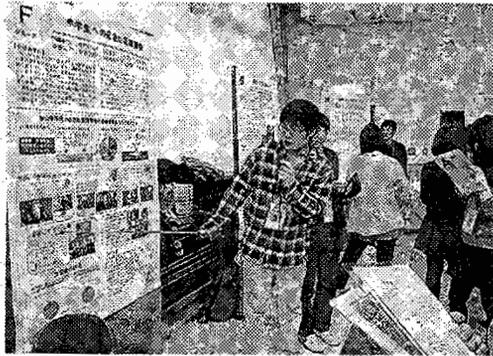
や篠島、地元の商店街、学校、病院などを活動の場として選り訪問。各地域で健康や医療に関する問題を探しだし、解決策や課題をポスターにまとめた。

豊根村のチームは、大規模災害時の備えとして、高齢者が自分の処方薬をどの程度認知しているかを調査。多くの人が医師や家族任せで、薬の名や服用量を正しく記憶している人は少なかった。学生たちは服用情報を正しく知ることの重要性を啓発し、「お薬手帳」

を持ち歩くことを呼び掛けた。

ほかにも、地元の高校で父母から「トイレが臭う」との声を受けて原因を調査したり、地元商店街の夏祭りに出店して熱中症対策を啓発したりした活動が

活動成果を発表する医療系学部の1年生ら。名古屋市瑞穂区の名古屋市立大で



報告された。発表会には学生や市民ら二百五十人が参加。話し方や論理性なども重視され、参加者はチェックシートで学生の「プレゼン力」も評価した。

カリキュラムを統括する同大医学研究科の早野順一郎教授は「医薬看の学部を超えた連携は全国でも珍しい。実際のチーム医療の充実や地域医療の改善につながるよう、継続的に各地域に関わって学習を積み重ねていきたい」と話した。

(加藤美喜)